

平成 24・25 年度大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	24S01	氏 名	尾崎 承子
研究主題 —副主題—	就学に向けた母親サポートの在り方に関する検討 —「小1プロブレム」の予防を視野に入れて—		
所属校	中央区立月島第一小学校	派遣先	兵庫教育大学大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	小1プロブレムの対策として、保護者に対するサポートや保護者と子供の関わりについての研究は進んでいるとはいえない状況がある。一方で、発達障害のある児童を持つ母親のストレスや、幼児ほど母親のストレスが子供のレジリエンスに関わっているという研究が進められており、母親のストレスを軽減することが子供の段差を乗り越えるレジリエンスになるであろうと言われている。また、子育てにストレスを感じている母親は、自信を低下させており、母親自身のレジリエンスを高める必要があるとも言われているということから、小1プロブレムにおける母親のサポートの在り方を発達障害の疑われる児童のストレス軽減の研究を参考にしながら検討したい。 そこで、本研究では、家族の中でも特に子供と接する時間の長い母親のストレスを軽減するサポートの在り方と、母子の関係、さらには、小学校入学に向けた子供のレジリエンスについて探ることを目的とする。具体的には、入学後の学校不適応が心配される年長児に対する就学前個別指導と、伴って行う母親へのサポートによる効果を、児童と母親におけるそれぞれの変化から見る。
II 研究の方法	事例研究 子供に育てづらさを感じ就学を前に不安を高めている母親（以下Mとする）と、個人要因もあり安心感を抱けずにいる年長男児（以下Cとする）の母子1組が対象とする。 ① 実施時期 201X-1年11月から201X年3月、週1回14:30～15:30、幼稚園の放課後にCへの個別指導とMへのサポートを包括的に計10回実施。 ② Cへの個別指導（14:30～15:15） 学習時間を小学校の1単位授業時間である45分間とし、小学校への授業時間をイメージできるよう実施。新しいことへの不安感が強いCの小学校生活におけるルールによる段差を低くすること、不安に感じそうなことに対し「ぼくにもできる」と自信を付けておくことを目的とし、学習内容を設定していった。 また、幼稚園での生活を振り返る時間を設け、Cが友達との関わりで思ったこと等を取り上げ、友達の言葉や行動の裏にある思いを考えられるようにした。また、幼稚園の生活で自信を得にくくなっている点について、Cの成長を言葉や振り返りシール帳で伝えることにより、自信を回復できるように導いた。 ③ Mへのサポート（15:00～15:30） Mの発言を交流分析し自我状態をつかみ、Cへのプラスアプローチができるよう導いていった。 15:00～15:15は、Cと筆者との関わりを見て、子供との関わり方や子供の捉え方を考え、M自身のCへの関わり方について振り返ることができるようにした。 15:15～15:30は、Cへの個別指導を終了後、Mと筆者で面談を行った。その中では、関わり方を見て思ったことなどをM自身が話すことや、筆者からCのよい所、よい所の引き出し方などを伝えるとともに、Mの頑張っているところやよい変化について伝えることとした。 面談は、個別指導の部屋で行う。その間、Cは片付けを行い、早く終

	わった場合は自習をして同室内で待っていた。そのため、面談において、CのよいところをMに伝える場合はCに聞こえる大きさの声にし、取り組みづらかった課題等を伝える場合はCに聞こえないよう配慮した。
Ⅲ 研究の結果	① 個別指導中におけるCの発言の変化 叱られる機会の多かったCは、個別指導を始めた頃は自己評価がとても低かった。また、褒められることに敏感であり、褒められたことに対し喜びを表している。結果的に、褒められることで自己評価はどんどん高くなっていることが発言から分かる。 また、Cの中には誰を喜ばせたいという思いの強さがある。Cが頑張っている様子をMや周囲の大人が喜び、Cに伝わるように表現することが意欲や自信の向上に有効であると推測できる。 ② 個別指導時の面談におけるMの発言の変化 初めは、Cに対するマイナスの発言が多く見られたが、Cと筆者の関わりを見るうちに、M自身に対するマイナスの発言に移行している。Cの行動の原因は自分にあるのかもしれないという言葉である。その気付き後に、母子双方の良好な変化をしている。 ③ Cの発言とMのCに対する発言の比較 MのCに対するプラスの発言とCの自己評価は、伴って上昇している。一方、MのCに対するマイナスの評価が急激に下がったときに、Cの自己評価が急激に上がっている。 ④ 介入前後におけるMのストレスの変化 SCL-Sのストレス項目が8点から5点へと変化している。これは、大きな差ではないが、人と会うことがおっくうでなくなったことは大きな変化と言える。幼稚園の母親たちとの関わりを拒んでいたMが、母親たちの輪に入って過ごすことができるようになっていく。 ⑤ 介入前後の交流分析によるMの自我状態の変化 介入前は「自他否定」型のエゴグラムとなっている。他の人との温かい交流がもちにくく、自分に対して肯定的な構えが取りにくい自我状態にあるともいえる。一方、介入後になると「自他肯定」型のエゴグラムとなっている。他の人との間に温かい交流が行われやすく、FCもある程度あるので自分を適切に表現でき、人間関係がうまくいきやすい自我状態になったといえる。 ⑥ 介入前後におけるCのレジリエンスの変化 幼児用レジリエンス尺度において、Mと幼稚園教諭の双方が同様の変化を認めている項目は、意欲の項目3点もあり大きな変化となった。
Ⅳ 考察	本研究を通して見えてきたように、小1プロブレムなどの問題に立ち向かうためには、教育の場のみならず、家庭でも同時にサポートを行っていくことが重要であり、そのためには母親が小1プロブレムを理解し、子供とどのように関わっていく必要があるかも理解している必要がある。しかしながら、母親がこのような子供と対面することには大きなストレスを感じる可能性があり、母親がストレスを抱えている状態では子供レジリエンスの低下を引き起こすという負の連鎖が起きることもある。 小1プロブレムが発生する前に、「子供とともに母親に対してサポート」することにより、予防的な効果が得られ可能性を本研究は示唆しているのではないかと考える。